

12日 日曜

サムエル I



21:10 ダビデはその日、ただちにサウルから逃れ、ガテの王アキシュのところに来た。
21:11 アキシュの家来たちはアキシュに言った。「この人は、かの地の王ダビデではありませんか。皆が踊りながら、『サウルは千を討ち、ダビデは万を討った』と言って歌っていたのは、この人のことではありませんか。」

21:12 ダビデは、このことばを気にして、ガテの王アキシュを非常に恐れた。

21:13 ダビデは彼らの前でおかしくなったかのようにふるまい、捕らえられて気が変になったふりをした。彼は門の扉に傷をつけたり、ひげによだれを垂らしたりした。

21:14 アキシュは家来たちに言った。「おい、おまえたちも見ているように、この男は気がふれている。なぜ、私のところに連れて来たのか。」

21:15 私のところに気がふれた者が不足しているともいうのか。私の前で気がふれているのを見せるために、この男を連れて来るとは。この男を私の家に入れようともいうのか。」

この「おかしくなったようなふるまい」というのも解釈が二通りで、機知が与えられて主に守られた信仰…という見方と、信仰が足りないゆえに人を恐れたみじめな姿…という見方とがあります。そして現実はその両方であると言えるでしょう。

人の行いは白か黒かで判断できないものです。トラブルや災害など極限に近い状態では、様々な考えや判断や価値観や優先順位が入り混じるものです。そして結局、ダビデの場合もそうですが、最後には主の愛と憐れみ、そして選びの確かさが残るのです。苦難の中で人が取った行動を批判することはでき

ませんし、また自分の取った行動が批判されても、それを理由に自分を責める必要はありません。主がそれをどうごらんになっているかが重要なのです。

ダビデに関しても賛否があったでしょうが、彼の心には自責の念で萎縮する思いよりも、主への信頼が強くなったはずです。それで後にサウルの命を助け、王となるための信頼を確立することができたのです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

